

1. 研究主題

「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業デザイン －『省みる』ことを通して－

※ 『省みる』は、本校独自の用語として用いている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「子どもが自分の学びを『省みる』こと」に着目して、「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業デザインをし、子どもの資質・能力を育むことである。そのために、次の仮説のもとに研究を進める。

【仮説】 子どもが主体的に各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、自分の学びを『省みる』ことを通して対話が起こったり、対話がきっかけとなって『省みる』ことをはじめたりすることで、深い学びに向かうことができ、子どもの資質・能力を育むことができる。

上記仮説を設定した意図を説明する。

深い学びに向かうためには、『各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、今ある「自分の考え」を立ち止まって吟味する』ことが大切である。なぜならば、このことが自分の今もつ知識との繋がりをつくり、子どもが自分事として考え始めるきっかけとなる。つまり、子どもが「なりたい自分」への「見通し」をもち始めるということでもあると考える。

また、『他者の表現からその背後にある意図や意味、意義について着目し、立ち止まって今ある「自分の考え」を調整しようとする』ことが大切であると考え。本校には、「自分の考え」を表現できる子どもが多い。しかし、「主体的・対話的で深い学び」に向かわないのはなぜなのか。それは、自分の知識や友だちの意見の背後にある意図や意味、意義に着目したり、その大切さに気づいたりする経験をあまりしていないからではないかと考えられる。そのきっかけをつくることにより、背後にある意図や意味、意義に着目し、立ち止まって今ある「自分の考え」を調整しようとすることで、新たな「自分の考え」をもつことのよさに気づくようになるはずである。

この2つの視点を『省みる』と定義する。

『省みる』とは、

- ・ 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、今ある「自分の考え」を立ち止まって吟味する。
- ・ 他者の表現からその背後にある意図や意味、意義に着目し、立ち止まって今ある「自分の考え」を調整しようとする。

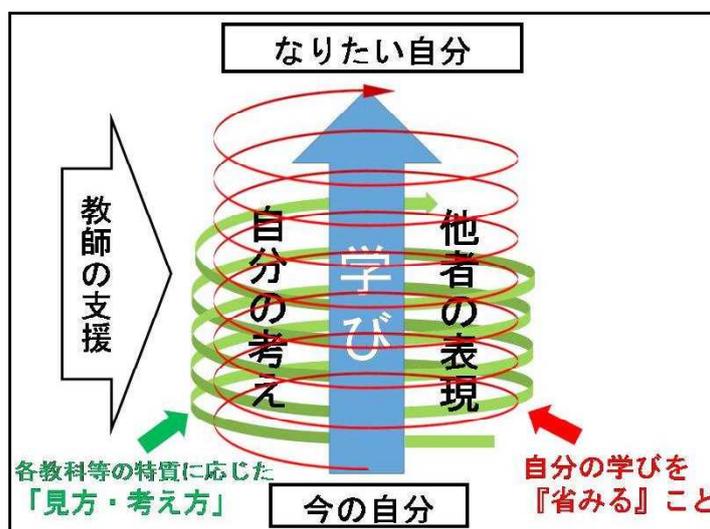
ことである。

『省みる』ことは、子どもの学びの展開の中で、どの場面でも起きる可能性があるものであるが、自ら『省みる』ことができる子どもは多くない。『省みる』ためには、まずは教師がきっかけをつくり、『省みる』ための支援をすることが必要である。さらに、教師がその都度支援するだけでなく、子ども自身が、「相手」「目的」「状況」等にあわせて、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、自分の学びを『省みる』ことを通して、「資質・能力」を発揮できるようになることをめざしていく。

3. 研究の方法

本研究においては、次の方法で、「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業デザインを行う。

本研究がめざす「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業デザインをすることで、子どもが「今の自分」をもとに、『省みる』ことを通して、「学び」を深め、「なりたい自分」の実現へ向かうと考える。



「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業デザイン

そのための教師の支援として、子どもが主体的に各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせるために、多様な関心や考え、判断を引き出す課題や場を工夫する必要がある。その際、まず指導者は、子どもが自分の「見方・考え方」を働かせていることを賞賛する必要がある。その上で、「見方・考え方」の働かせ方の違いに着目させることにより、その意図や意味、意義に気づかせ、学びを共有できるようにする。

それにより「主体的な学び」と「対話的な学び」の両面が結びつくのである。

なお、本研究では、具体的な教師の支援として、以下の3つを想定し、具体的には、各教科等で実践に取り組んでいくものとする。

課題設定	一人ひとりの「見方・考え方」を働かせ、その多様な「見方・考え方」が働きあう課題
場設定	「自己」と「他者」との関わり
可視化	学びの構造化、「他者」との意図や意味、意義の共有

【参考文献】

- ・奈須 正裕 (2017) 『『資質・能力』と学びのメカニズム』 東洋館出版社
- ・C.ファデル他 (2016) 「21世紀の学習者と教育の4つの次元」 北大路書房
- ・深谷 達史 (2016) 「メタ認知の促進と育成」 北大路書房
- ・石井 英真 (2015) 「今求められる学力と学びとは」 日本標準
- ・田島 充士 (2010) 「分かったつもりのおもしろさを探る」 ナカニシ出版
- ・佐伯 胖 (2007) 「共感一育ち合う保育のなかで」 ミネルヴァ書房